

3月3日に行われた宮古市市民交流センター主催のイベント（『3.11語り継ぐ若き記憶』において、東日本大震災に関連する15編の小論文を朗読してくれた宮古高校放送部の4名の生徒に、後日感想等を記入してもらいました。

A. 放送部の方への質問です。朗読をしてみて感じたことや思ったこと等を教えてください。（簡条書きでもOKです）

- ・「震災学習を普段学校でする時よりも心にくるものがあった。声に出して朗読することで、当時の状況について改めて思い出すきっかけになった。」
- ・「読んでみて、震災を経験し覚えている世代だからこそ伝えられる事もあるかも知れないと思った。」
- ・「震災の経験を通して同世代の人が感じたことを知って、共感できる部分や今まで知らなかった部分がたくさんあった。」
- ・「他の人の想いを伝えることの難しさを感じた。」
- ・「初めて当時の若者の声を聴いて、『こんなことがあったんだ。』と新しい知識を得られた。」
- ・「悲しい気持ちになった。」
- ・「今の自分と同じ世代の人達が、当時感じた事を初めて知ることができました。年が近いからか、共感できる点が多かったです。」

B. イベントに参加して、参考になったことや感想、あるいは実施方法等へのアドバイスがあれば記入してください。（簡条書きでもOKです）

- ・「3.11を体験した小中高生の気持ちを自分の声で伝えられて良かったです。気持ちを入れて読んだので、聴いてくれた人にとって当時の高校生の姿と重なるものがあれば嬉しいなと思います。」

- ・「震災や防災について今まで知らなかったことをたくさん学ぶことができた。」
- ・「それぞれの立場で、防災について取り組んでいることを知った。」
- ・「市民の前で朗読するのは初めてだったので、とても貴重な体験となった。」
- ・「マングローブ林の話で、エビ養殖が震災に影響するということが分かった。」
- ・「文章の中に、震災当時の記憶やそれについての感想だけではなく、どう繋げていくべきか、何をすべきかなど、これから関わる内容のものもあって、読んでいて勉強になったし、あまりそういったものを読む機会がないので参考になった。」
- ・「私たち学生には、震災を知り、思い出す機会はあるけれど、どう繋げるかを考え実践する機会が少ないと思うので、自分たちが風化させないためにどうすべきか考える機会も欲しいと思った。」

C. こちらは、もし協力が可能であれば、で良いです。

別冊子の小論文 15 編のうちから 1つを選び、以下の A～C について 記載をお願いします。（簡条書きでも OKです）

選んだ小論文の番号（01～15） 番号

A：著者は、どういう想いでこの文章を書いたのか？

B：あなたが共感したのは、どういう所ですか？

C：選んだ小論文を読み、これからあなたができることは何ですか？

（1）（令和6年度宮古高校3年 Aさん）（震災当時、3～4才）

A：「筆者は、どういう想いでこの文章を書いたのか？」

復興に必要なことは、「伝える」こと、「切り換える」こと、「返す」ことであり、震災を通して経験したこと、得たこと、学んだことを世界へ繋げることは、今、わたしたちがすべき

ことであるという思い。

B：「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

震災で失ったことは大きいけれど、得たものが何もない訳ではないこと。「誰か」ではなく「私達が」、「いつか」ではなく「今」助け合いの輪を広げるべきであるということ。

C：「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは？」

自分は、震災で何かを失った、とても苦しい思いをしたという訳ではないが、自分にも何かしらは内陸の人、世界の人に伝えられると思うので、惜しまずに伝えたい。

また、自分にできること（避難を自分からする、日頃の備え）を大切に、震災を知らない人のお手本になることはできると思う。

選んだ小論文 04) (震災当時、中学1年) 『3. 11から三年目の今、私ができること』

現在、私達がすべき復興への手助けは、一番はまず「伝える」ことだと思う。アチエの地にある『津波博物館』や、『ノアの方舟』で助かったガヤさんの語り部としての活動のように、後世に残せる形で伝えていかななくてはならないと思う。私は中学3年生の時、近い将来に大地震や大津波が来ると言われている和歌山県に、被災地の学校の代表の一人として講話をしに行ったことがあるが、やはり私達が身をもって痛感した悲しみや辛さ、震災への備え方は、できるだけ広める必要があると思う。

二番目は、「切り換える」ことだと思う。アチエの人々は、大災害を神様の恵みとして受け止め、プラス思考で前に進んでいる。「日常への感謝」や「たくさんの人との出会い」は、あの災害があったからこそ在るのである。命や大切なものもたくさん奪われたが、得たものも少なくはない。

そして、三番目、「返す」ことにつなげることが必要なのだ。「今までの分」「これからの分」、私達が災害を経験し、学んだこと、活かしたこと、失敗したことなど、全てを他の人の役に立つように使い、恩を返すのだ。

資料を読んで、文化は違っても「思いやり」や「助け合い」の精神は、どこにでも同じく存在していることを知った。文化や国境を越えた思いやりや助け合いの輪は、無限に広がると思う。そしてそれは今、私達がやらなくてはいけないし、私達が広げていくべきだと考える。

（２）（令和６年度宮古高校３年 Bさん）（震災当時、3～4才）

A：「筆者は、どういう想いでこの文章を書いたのか？」

震災を体験した先輩の方々の想いを、次の世代に伝えていきたいという気持ちがあったと思う。

B：「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

「命はてんでんこ」という言葉は小さい頃から聞いていたので、共感できました。

C：「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは？」

これを書いた方と同じように、新しい世代の人々に伝承していきたいと思います。

選んだ小論文 06）（震災当時、中学２年）『3. 11 から四年目の今、私ができること』

私は、非常に海が近い小さな集落に住んでいました。しかし、東日本大震災によってこの集落は全滅してしまい、現在も仮設住宅で生活しています。震災後、その集落は災害危険区域に指定され、家を建ててはいけなくなっています。再び同じような被害を受けないための対策の一つです。この地域は、明治三陸大津波や昭和三陸大津波でも多くの被害を受けました。このことを後世に伝えるために先人は、津波到達地点を示した石碑と、二度と多くの犠牲者をださないように「此処より下に家を建てるな」と書かれた石碑を後世に残してくれました。この石碑については、これからも伝える必要があると思います。また、小学校で1年おきに行われる、昭和三陸大津波をテーマとし、当時の様子を台本にした全校表現劇「かがやく海の重茂に」もずっと伝えていくべきだと思います。私たちは、この劇のおかげで早いうちから過去にどのようなことがあったのか分かり、津波の恐ろしさを理解することができました。犠牲者が少なかったのは、これが理由であるかもしれません。

私は先人がしてきたように、後世へ自分が体験したこと全てを伝えていきたいと思います。二度と犠牲者を出さないために。震災後に建てられた石碑にはこのように記されています。

『後世への訓戒 大地震の後には津波が来る とにかく高い所に逃げろ 住宅は津浪浸水線より高い所に建てろ 命はてんでんこ』

（3）（令和6年度宮古高校3年 Cさん）（震災当時、3～4才）

A：「筆者は、どういう想いでこの文章を書いたのか？」

助けられた命を、もう二度と失いたくないという想いで書いたと考える。

B：「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

歌や手遊びなら小さい子でも覚えやすいと思った。親から子へ、先生から生徒へと受け継ぎやすい防災だと思う。

C：「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは？」

今後、震災について、防災について考える機会があったら、どんな人でも分かりやすい歌や言葉遊びなどを使って、長く受け継がれるものを考えたいと思う。

選んだ小論文 07）（震災当時、小学6年）『東日本大震災を後世に伝える方法』

私が東日本大震災を後世に伝える方法として最適だと思うのは、シムル島で歌われている「スモン」のように、親しみやすい方法で伝えることだと思います。「スモン」は、韻を踏んだり、リズムカルなので、子どもでも分かりやすくなっています。そして、歌うことによって覚えやすくなっています。歌詞も明るく、避難するときに役立つものが多いです。後世に伝えるべき事は、「津波の恐さ」だけではなく、「どのようにして逃げるか」だと思います。

伝えるためには、歌をつくる他にも、「紙芝居」や「絵本」、「かるた」など、子どもの遊びを取り入れるのが良いと思います。そうすることで、小さい頃から遊びながら津波に対する知識をつけることができます。私が卒業した小学校では、実際に「津波防災かるた」というものがありました。その「津波防災かるた」は卒業生が作ったもので、小学生でも分かりやすくて、内容も面白いものが多かったです。こういったものを、もっとたくさん作って、幅広い世代の人達に楽しみながら覚えてもらえれば、もっと後世に伝えやすくなるのではないかと思います。

震災から時間が経てば経つほど、人の記憶から忘れられてしまうので、後からみても分かるように、形にして残すのが最もいい方法ではないかと思います。

（４）（令和６年度宮古高校３年 Dさん）（震災当時、３～４才）

A：「筆者は、どういう想いでこの文章を書いたのか？」

自分の経験を通してできることや、８年経ったからこそその悩みを、多くの人に知ってほしいという想い。

B：「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

経験をしていない子供たちや、記憶がほとんどない子供たちへの伝え方の難しさ。

C：「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは？」

いつ起きるか分からない災害に対する準備をしっかりとる。

近所の人との交流を大切にし、いざという時に助け合えるようにする。

選んだ小論文 13）（震災当時、小学２年）『東日本大震災から８年目の今、私ができること』

８年前の私は小学２年生でした。地震というものをあまり理解していなく、とても怖かったのを覚えています。帰りの会の時、机がとても動いていて、机の下にもぐるのも必死でした。

今の小学生は、震災を経験していない学年があり、小学校の先生が３月１１日になると津波の話をするらしいですが、経験をしていない子供達や記憶がほとんどない子供達にどのように東日本大震災の事を伝えようか戸惑うらしいです。また、当時内陸の方の小学校に勤務していた先生方も多く、子供達に当時どのような事があったのか伝える人も少なくなっているそうです。そのため、高校生の私達や中学生が当時見た景色などを絵に描いて、小学生に説明したり、その時の気持ちなどを分かりやすく語ったりして、未来のために津波が来たらどうしたらよいのかを伝えながら、死者をできるだけ減らすようにしていきたいです。

また、地元の子供達だけではなく、将来私が山田町や岩手県を離れたとして、その時大きな地震などが来たら、経験をしていない周りの人を誘導などし、自分から動いて死者を減らしたいと思っています。身近な人が亡くなっているからこそ、そして小学生の時にいろいろな先生方や大人の人に助けってもらった分、次は私が助ける番だと思いながら大人になりたいし、津波に限らず災害に遭った方々を助けたいです。